

# UIFA JAPON

## NEWSLETTER

### ■主な内容

第12回UIFA日本大会の開催に当たって

第12回日本大会テーマ

「環境共生時代の人・建築・都市

—21世紀における調和的関係の構築をめざして—」によせて No.1

寄稿 阪神大震災その後 現地からのフラッシュレポート

会員の自己紹介 No.4

UIFA JAPON 事務局を訪ねて

### ■第12回UIFA日本大会の開催に当たって

1996年11月

UIFA JAPON 会長 中原 暢子

UIFA JAPON (国際女性建築家会議 日本支部)とは何だろうか? UIFAというのはフランスのソランジュ・ド・ラ・トゥールさんという女性建築家が、女性の建築家は、男性の建築家に比して、仕事の面でも、身分的にも恵まれていない。それには個人的に運動しても大した力にはなり得ないから、何とか世界的に女性建築家又はそれに近い領域の仕事をしている女性達に呼びかけて、「組織をつかってより強い力を発揮し、少なくとも男性と同じように、またはそれ以上に女性が活躍できるようにしたい」ということで、1963年に発足した会です。バックが何もあってもなく、資金源も運用面も彼女の力量で、組織され運用されてきてといっても過言ではない非常に小さく創立された会なのです。

日本にも1963年の第一回総会の時から、その主旨の呼びかけがありました。個人的に呼びかけた会としては、彼女の情熱が反映される大変盛大な発会式がパリで行われました。日本からは草野智恵子さんと私の2名、現地でパリに留学中であった林のり子さんも参加しました。1963年の日本は、外貨の持ち出しが1人500\$。私と草野さんは何と船で1ヶ月かかってパリに到着しました。それから今年の第11回ハンガリー大会まで世界各地で開催され、毎回平均50ヶ国、200人程度の参加で33年間続いて来たわけです。

これだけ永く続いたのは、UIFAの志しに世界中の人達の共感を得たからとも言えると思うのです。最近では世界も狭くなって、個人的にはいくらでもいろいろの人達と交流もできるわけですが、それでも、世界のあちらこちらから声がかかり、そこに出掛けて、共通の仕事意識を持った友人が出来たり、それをきっかけとしてさまざま勉強が始まったり、個人では見難い建築や都市開発の状況を見学したり、珍しい食物にめぐりあったりするのは、全く素朴に考えても楽しいことの一つになっております。

30年余の間には、女性という意識も変わってきています。日本の

状態を見ても、まず女性で建築専門教育を受けている人が大変増加しております。仕事の問題にしても、発足当時とは、問題にならない程状況は変化して、「今更女性でもないのではないか」と言われているのも事実なのです。しかしそれでもUIFAに協力したいと思ひ、かつ日本で国際会議を2年後には開きたいというのには、それだけの理由があるのです。

国際交流は、UIFA JAPONの基本的課題です。世界中の人に、まず日本と日本人を知ってもらいたいです。それには我々が出掛けて行くだけではなく、日本に来ていただいて、実際に目で見、肌で感じていただきたいのです。国際会議を準備するための時間も人手も少なく資金も乏しいUIFA JAPONですが、それでも日本で開催する価値は充分にあると思っております。1つには今回のテーマ、「環境共生時代の人、建築、都市—21世紀における調和的関係の構築をめざして—」にあります。大会のテーマは非常に大きくどの国でも問題になっていることだと思います。日本においても21世紀に向けて大きな課題の1つです。2つ目には、開催地域と時期の問題があります。今までの11回の開催地は、ヨーロッパが一番多くあとは、アメリカ、アフリカ、イランなどで、アジアではまだ一度も開催されておられません。そこで日本で開催することをきっかけに日本を含むアジアの問題点も明らかに把握してもらいたいです。今世紀最後の大会ということもあります。また強いて言えば、ド・ラ・トゥールさんのお元気な内にという気持ちもあります。

若い方々は、UIFAは「何だかよく判らない」とおっしゃるかもしれませんが、将来国際的な活躍をなさる基盤作りのためにも、女性の地位向上を図るためにもまず草の根レベルの友達作りから私は思ひます。真の国際交流は、個人的なものにとどまらず文化や風土を理解し合い、その上で調和的関係の構築をすることだと思います。

以上のことから、UIFA JAPONは会員を増やして、より有意義な国際交流を進めていかねばよいと、考えております。

ぜひお友達をお誘い下さい。

## ■「環境共生時代の人・建築・都市—21世紀における調和的關係の構築をめざして—」によせて No.1

### 「環境共生時代の人・建築・都市」について考える

日本女子大学 小谷部育子

5年前には、ワープロの前に座らなければ文章が書けない自分などは、想像も出来なかった。鉛筆をなめなめ消しゴムのかすをまき散らし、くずかごを原稿用紙で満たさなければ、人に読ませられる文章など書けるわけがない、などと嘯いていた。しかしそのとき、FAXは既になくなくてはならない存在になっていたのを思い出す。そして今、研究室のコンピューターは、インターネット、電子メールを友とする主人を待っている。来年度からは、設計教育によいよCADを取り入れるとか。いやはやである。世の中の後追いをしながらも、いやおうなしに不気味な情報社会とやりに首をとられつつあるのだろうか。足だけは決して拘われまい。

先日NHKテレビで、アメリカの仮想現実のソフトを開発している研究者と、そのユーザーのドキュメンタリー番組を見た。研究者の一人は、「社会はますます悪くなる。仮想現実の世界では、欲しいものがなんでも手に入るから、人々はそこに生きがいを見いだす」と言う。他の研究者は、「仮想現実で体験？したことが、現実の問題解決に役立つ」と言う。そして、ユーザーも現実逃避派と、問題解決のためのシミュレーション派が登場する。

環境共生時代とは何を意味するのだろうか。私はエコ・フェミニズムの価値観が支配する時代と考えたい。性、障害、年齢など、人間の身体性の、あるがままの現実の容認と、静的でなく、ダイナミックな係わりのプロセスを通して、相互に影響し合い、生かし合う関係性を築く時代である。身体性は、その存在を在らしめる自然とも切り離すことはできない。情報技術が発達すればするほど、身体性を伴う、人と人、人と自然のダイレクトなコミュニケーションが求められる。

高度工業化時代、特に日本の戦後の高度成長をささえた価値観は、機能性や経済的利潤を追求し、社会的ストックの形成よりも、当面の物質的豊かさを奨励して消費を拡大し、勝者と敗者という社会の構図を構築してきた。結果として、自然も人間も疲弊し、疲弊した社会を維持するために、膨大な経済力が必要とされる、という悪循環に陥っている。そして、女性や子供、高齢者、障害者は社会的弱者として、未だに二級市民扱いである。街も社会も、仕事も遊びも、移動は勿論、住宅入手さえも、およそアクセシブルとはいえない。

高度情報技術を、現実逃避ではなく、誰にとってもアクセシビリティのある都市や社会を構築するために、環境共生時代の価値観と社会のパラダイムの構築のために、役立たせたいものである。環境共生時代の人・建築・都市づくりのキーワードは、「身体性の復権、そして、参加による共生のための関係性づくり」である。

### 環境共生時代について

アクセス住環境研究所 田中 厚子

第12回UIFA日本大会のテーマ「環境共生時代の人、建築、環境」は、実に間口の広いテーマである。環境共生という言葉から連想するものは、人によって多様であろうが、直接的にはエコロジー考慮の建築や都市といったものが思い浮かぶ。

カナダのモントリオールに、バイオスフィアという直径80メートルに及ぶドームがある。現在エコウォッチ・センター（水資源科学館と呼ぶにふさわしい内容）として学生や一般の見学者が訪れるミュージアムとなっているが、もともとは1967年万博の時のアメリカ館であった。

モントリオール万博といえば、カナダやアメリカの黄金の60年代、工業技術信仰がピークの時代である。未来都市の夢は手の届くところにあるように思われた。バックミンスター・フラーの設計によるこのアメリカ館は、彼が1961年に発表したマンハッタン・ジオデシック・ドーム・プロジェクトの小規模な具体化ということで評価され、以降の万博の立体トラス・ブームの火つけ役ともなった。

しかし現在バイオスフィアが水資源の科学館として再利用されていることは、時代の流れとして象徴的である。マルチ・スクリーンやコンピュータが並ぶ近代的施設だが、そこで係員が見学者に説明するのは、「トイレの水を流す回数を減らして節水しましょう」といった類の話である。当初アルミの立体トラスにはめ込んであった透明アクリルがすべて未修復のため、ドームと建物間の空間が吹きさらしの状態なのがかって自然で良い感じだ。

日本に比べれば、カナダはより環境と共生したバランスのいい状況にあると思う。まず広大で過酷な自然との共生。夏は水辺のコテージやキャンプでおもいきり太陽を浴び、冬もなおスキー、スケート、そり、散歩と積極的に戸外で遊ぶ。自然ばかりではなく、人種的共生、高齢者や障害者との共生、そして建物の保存や博物館の充実など歴史との共生に関しても先進国である。

その点、経済一辺倒で来た日本の歪みは大きい。人間らしい余裕のある生活をないがしろにしてきたつけは、物では補いようがない。今、共生を考える時、エコロジーもエネルギーも大切だが、各個人が生活の中で何を最優先するかが問われているような気がする。

また、大気汚染、環境破壊、資源不足、廃棄物処理など深刻な問題が山積みされ、素直にものが造れない時代、さらに、個々の個性が尊重されねばならない時代において、保存と再生の問題がもう少し重要視されるべきではないだろうか。特に内外空間のつながりの多様性という日本の住宅の特性が、消えていくのは寂しいと思う。

環境共生時代とは、「あれもこれも」の欲張りな時代から「あれかこれか」の二者択一の時代への移行だと思う。石鹼か合成洗剤かということから、私たちは常に選択を迫られているのだといえる。



9210010 草野智恵子

まだ会員にさせていただいていることが、インチキな私です。'58年学部卒業後、広瀬謙二建築技術研究所に入所し、鉄骨造の建築の設計、プレファブ建築の開発等に携わりました。'63年には、中原会長のお供で、第1回UIFA会議に出席させていただきました。



その後、早大安東研究室に所属し、理工学部キャンパスの設計、東海大学非常勤講師などを致し、'86年都市計画からイヤリングまでというキャッチフレーズで、第一設計・アトリエ9という事務所を開設致しました。3年程で健康上の理由により、医者から現場に出る事を止められ、都市計画、建築の世界からは足を洗いました。現在は残った、小物のデザイン、ビーズ織り、編みによる装身具（バッグ、ネックレス、イヤリング等）を造っております。今年9月に第3回今背展を銀座のギャラリーオガタで開きました。年に一度、展覧会を開くことを自分に義務付け、怠け心にブレーキをかけております。

建築の設計をやっておりました頃は考え、決定したことを、他の人の手で造ってもらうため、思い違いや諦め等のストレスもありましたが、現在は考えた事、造る事ほとんどが自分で出来る気楽さがあります。金曜と土曜、13:00~17:00 自宅下、店舗で自作のガラクタを並べ、見せびらかしております。お序でのおり、お立ち寄り下さいませ。（宣伝までしてしまいました！）

9210011 小池 和子

私は北国の山形で生まれ、蔵王や月山を眺め、愛宕山や千歳山に登り、馬見が崎川で泳いで育ちました。女子大を卒業後、設計連合、山田水城建築設計事務所、杠建築設計事務所に通い、現在 UIFA JAPON 事務局のある生活構造研究所におります。



仕事は住宅や学校、施設の設計に携わってきましたが、ここ数年、公的な集合住宅に高齢者用住戸を供給する計画を担当しております。生活を包む住空間のバリアフリー化と生活を支える仕組みが大きな課題ですが、生活の広がりやコミュニケーションの大切さを考えると住戸だけではなく、人が出会う通路や道路、広場や公園、地域やまちを大きな生活空間としてとらえていくことがとても大事であることが、この仕事を通して見えてきます。大学のゼミで「道路は通過する為だけでなく、留まり、そして交流がうまれる生活空間の一部である」ことをテーマとしていたことを考えると、不思議なつながりを感じます。最近参加した、サンフランシスコヤストックホルムの視察では、行政の柔軟な対応や、家族的な空間や生活が高齢者の日々の生活に大切であることも体験してきました。

このように「バリアフリー環境づくり」にどっぷりつかっている私ですが、趣味で地域のママさんソフトボールクラブに十数年間所属し、気分転換をしています。先日はエルダー大会で勝ち残りました。今後は徐々に審判にシフトします。会員の皆様、よろしく!!

9210013 小渡佳代子

栃木県第二庁舎、大館市立総合病院、秋田県職員会館にスタッフの一員として無我夢中で関わり、公営住宅、警察署、体育館、身障者コロニー等の設計に明け暮れた。毎日終電車で、寝に帰るだけの生活だったが、結構充実していた。しかし、気がつくと現場のことに疎く、デスクワークしかできない。何とか自分を打破したいとおもっていた時期、出産。鳥取県第二庁舎、八雲立つ風上記の丘資料館等が、設計事務所を退所した頃の仕事だったように記憶している。ずいぶん昔のことになってしまった。



二児の子育ての現場は、全く教科書どおりにいかず、四苦八苦だったが、最近やっと、随分勉強になったと思えるようになった。子育てしながら仕事をしていくには、ジェンダーの視点を避けてとるわけにはいかない。高齢者の住宅や二世帯住宅を設計しているが結局、共働き夫婦のサポートになるような住宅の仕事が多く、施主も女性が多い。土、日が打合せでつぶれるが、仕事を持つ女性が家を造ろうとする時、子育て、家族、生活、生きがい、老後をどのように考えているかにふれ、自分が育ってきたような気がする。

専門学校で教えたこの10年間は、実は今までで一番勉強した10年だったかもしれない。ここで一区切りと考え、来年終わりにする。勿論UIFAの大会は参加をしたい。世界の女性建築家のアイデンティティが伺え、ジェンダーの視点をもって設計していく上で、とても参考になっている。

9310050 久保 直子

こんにちはUIFAの会員になって数年経ちますが、九州・福岡なので活動にほとんど参加出来ていません。でもNEWS LETTER が届くと、何となく嬉しくなって、頑張んなきゃって思っています。



仕事は意匠設計をしています。しかし、大学ではあまり図面を描かなかったので、毎日が落ち込んだり、なるほど!だったり、実設計は難しいと実感し続けています。社会人になって3年目になり、そんな中でも周りの状況が見えてくる様になりました。そして、これから私は建築とどう仲良くしていこうかと日々考えています。こんな私にもささやかな夢があり、住宅のような目のいき届く規模の設計をやりたいと思っています。だから、実務で学ぶべき部分は吸収していこうとしたり、建築雑誌を見たりしています。他に勉強方法がありましたら、是非教えてください!!

福岡はここ数年の間に新しい建物が出来ています。これは建築に関わっている者として楽しみであり、またその長短を見極める力を持たないといけないなあと感じています。

9310067 河原美津子

第一線で活躍なさっている方が大ぜいいる中で、女であればこそ、私のようなものがいてもいいのではと居直って、明日の我が身を夢見て参加している。



大学卒業後、設計事務所等でしばらく建築設計の仕事に携わった後、夫の海外赴任にともない渡米。渡米先では、あいつぐ子供の出生、育児に追われ、建築とのかかわりは時々著名な作品を見てまわること位。でも、ルイス・カーンのソーク研究所を見学した時には全く涙が出る程感動した。カリフォルニアのブルースカイと、海に向かって立つ建物のなんと美しいコントラスト、それは哲学的なシーンだった。約7年間の在米期間の後半、やっと子供達がナーサリーに行くようになって、1年半程、大学でインテリアについて学ぶ。その歴史の深さと、マテリアルの豊富さ、学生達のプロを目指す意識の高さには学ぶべきものがあつた。帰国後すぐ、自宅の建築をきっかけに設計の仕事を再スタートし、現在一人で細々とやっている。設計事務所に入ってから今日までに手がけた仕事は40余り、住宅、マンション、工場等々、仕事を通じて実に色々な事を学ばせていただってきた。最近、予算的にも、空間的にも厳しいものがほとんどだが、与えられた環境を見据え、実生活から得た経験を活かしながら、人にやさしく美しい建築を造るのが夢。自己のいたらなさを感じつつ、遅ればせながら皆さんについていければと願っている。

9510086 柏原 雪子

川嶋幸江先生より、すかいパース事務所を引き継いで早15年。有能なスタッフに恵まれ、女性だけのアトリエで、華やかに楽しく（というわけにはいかないが）パースペクティブの技術を武器に、デザイン活動を続けています。



この度、UIFAハンガリー大会に初参加させていただきました。UIFAのメンバーの方々は、世界中でいろんな活動をしておられ、大変に刺激を受けました。異文化の中に身を置く興奮ととまどいは、心地良ささえありました。そして、世界の女性建築家が、各々の立場で、何を感じ、何を考え、どんな価値観を持っておられるのかが、ちょっぴり見えました。これからのUIFAの活動は私にとっては、大きな存在で、意味のあるものになるでしょう。

今、興味深いことはナショナルトラスト運動です。これは趣味のガーデニングが高じて、英国の庭園廻りをした時、すばらしい庭園はほとんどナショナルトラストが管理・運営していたのがきっかけです。牧場や農場も単に生産の場としてだけでなく、動物にふれたり、農産物を育てたり過程が、疲れた人々の心を癒してくれるリフレッシュの場でもあるのです。又、土木建築開発によって行場を失った動物・鳥・虫達の為の環境調整もやっていきたいと思つています。

これで、老後の計画はできた様なものですが、今は目先の仕事に追われています。でも、老後なんて、すぐそこまで来てるのかな？

### ■寄稿 阪神大震災その後

現地からのフラッシュレポート

日高たか子

マスコミは神戸の復興ぶりをしばしば取りあげている。しかし、被災地（西宮市）に住む私にはそれほど実感はない。

震災から1年10カ月。カメラ片手に生活圏を歩いてみた。

平成8年11月



西宮沖、埋立地に建つ仮設住宅。買物はバスで15分。3度目の冬が来た。（西宮市西宮浜で町で）



復旧工事中の西宮市庁舎と仮設庁舎。約一年間、分散した仮設庁舎で業務が行われる。（西宮市六湛寺町で）

復興住宅建設用地。約3500戸。98年3月入居予定。ホテルリゾートマンションが建つ筈だった。（西宮市西宮浜町で）



震災前は買物客で賑わった商店街。再建のメドがたたない。仮設店舗がポツリポツリ。時計が5時46分で止まったまま。

一步、裏通りに入ると、まだ、こんな光景が見られる。（西宮市森下町で）



古い街並みを日々変えてゆく3階建ペンシル住宅、戸建プレハブ住宅そして、高層マンション。めまいを覚える。（西宮市平松町で）

※このコーナーに御意見、御希望をお寄せ下さい。

## バリアフリーの生活環境整備をめざして

都立医療技術短期大学 野村みどり



●障害者を取り巻く社会環境には、4つの障壁（バリア）すなわち、物理的な障壁（機械、建築、都市環境における）、制度的な障壁（各種資格制限、大学等の入試制度、就職・任用試験等における）、文化・情報面の障壁（点字や手話サービス等の欠如による）、意識上の障壁（無理解、差別、偏見等）があり、これらのハード・ソフトの障壁を除去することがバリアフリー（障壁除去）である。

バリアフリーを考えるときには、バリアの明確化が不可欠となるが、バリアの捉え方は社会の成熟度と大きく関わる。たとえば、欧米先進諸国では、肢体不自由児の統合教育の受け皿である学校施設の物理的バリアフリー問題は既に解決済みで、特別な教育的ニーズをもつ児童生徒のために普通学級における教育内容・方法、教材のバリアフリー化が課題である。しかし、日本では、学校は特定多数が使用すると捉えられ、1994年に成立したハートビル法（高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の促進に関する法律）の対象である不特定多数が使用する建物には含まれないなど、学校施設については物理的バリアフリー化以前の段階にある。

●同様に、障害を持つ人間と環境との相互作用によって生み出される総体としてのハンディキャップの明確化も重要である。たとえば、イギリスでは『高齢未亡人の孤独や不安』、『福祉入所施設における自律的でない生活』、『病院におけるストレスフルな透折治療』などまでをハンディキャップと捉え、そのハンディキャップを軽減するためのハウスアダプテーションが推進されている。スウェーデンでは、入院するこどものストレスフルな入院生活というハンディキャップを軽減するために、プレイセラピー提供が病院に義務付けられ、治療効果に貢献している。日本においては、ハンディキャップの明確化と、その軽減の公的保証は今後の大きな課題であり、このためには、多分野の協力・連携が不可欠である。

●物理的障壁除去設計であるバリアフリーデザインについては、障害者だけでなく、高齢者、こども、妊婦、乳母車に配慮し、皆が使いやすい、アクセスしやすいという観点は重要である。たとえば、視覚障害者のための情報保障対策に注目してみると、基本的には、白杖を使った歩行訓練リハビリテーションに基づき、白杖によって経路探索しやすい、安全な環境設計に加えて、多様な個別的ニーズに応じた福祉用具やガイドヘルパーの活用が重要となる。しかし、情報保障対策に関する総合的研究の歴史は浅く、実態としては未熟な内容が目立つ。たとえば、点字ブロックは、足の不自由な人々のバリアとなり、変色、褪色、磨耗など材料としても不適切なこと、また、音響信号や誘導鈴は周辺住民に騒音公害をもたらす等の問題は指摘されて久しく、それらの基本的矛盾を解決しないまま、その内容を法制化・条例化する動きには疑問がある。多分野の連携によるバリアフリー生活環境整備のあり方の明確化が求められている。

## 環境共生時代の私たちの仕事を考える

寺尾三上建築事務所 寺尾 信子



先日、50年ぶりに北京を訪れた母が、「50年前の北京の11月はあんなに暖かくなかった」と話していたのを思い出す。ヒートアイランド化など、都市環境が変化していることを窺わせる興味深い感想である。私たちは、自分の体験からは25～30年程度の環境の変化しか思い出すことができないが、データや文献などによれば環境が変化していることは確かなようである。

環境共生住宅の定義は「地球・地域環境を保全する観点から、地域の特性や住形態に応じて、資源・エネルギー利用や廃棄物処理の面で適切な配慮がなされるとともに、周辺の自然環境と親和し、かつ住み手が主体的に係わりながら、健康で快適に生活できるよう工夫された住宅、およびその地域環境。」とされているが、日常の設計の仕事の場面を顧みると、まだまだこれらの域には達していないのが現状である。

例えば、私たちにとって、住宅設計の中で「木」を使うことは欠かせないことであるが、消費する一方で、しかも実際の原材料は3/4を海外からの輸入に頼っており、「国内で循環型資源として消費に見合った生産が計画的に行われているのかどうか」というところまで考えが及んでいないのが実態である。

「フローリング」の話を一例として挙げたい。私はこの数年、新築あるいはリフォームの設計で、チーク・ナラ・国産のクリなどの無垢のフローリングを20数軒使ったが、先日訪ねてきた国産のクリ無垢フローリングメーカーの人が次のようなことを言っていた。

「最近自分が扱っているフローリングの原木の産地に行き、原産地の林の中で、樹齢百年にもなる栗の大木が切り倒される現場を初めて見てショックを受けた。こんな立派な木を商品にしてしまっても良いものか、とさえ思った。大切に使ってくれ、と願うばかりである」と。

健康住宅が何かと話題になる中で、積層フローリングの接着剤が問題の一つに挙げられているので、クライアントに無垢材を奨めて良かったとさえ思っていた私であるが、私自身も、樹齢百年の木がメラメラと倒れる姿を想像して、少なからずショックを受けた。

ひとの健康と住まいの係わりを考えることはもちろん大切であるが、私たち建築関係者は、もっと永い時間的、もっと広い環境的な視野で仕事を続けてゆかなければ、環境破壊の当事者になってしまうかもしれない。

より良い方向に向かって今後皆さんと一緒に勉強を重ねてゆきたいものです。

# Union Internationale des Femmes Architectes Japon

## UIFA JAPON 事務局

〒102 東京都千代田区麹町2-6-5

麹町E・C・Kビル 株式会社生活構造研究所内

TEL03-5275-7861 FAX03-5275-7866

### ■ UIFA JAPON 事務局を訪ねて

UIFA JAPON 事務局は、地下鉄半蔵門駅から徒歩3分、生活構造研究所内にあります。広々とした事務所は整然と落ち着いていながらもソフトな雰囲気満ちていて、さすが女性の多い職場です。理事会が毎月行われる大テーブルで松川淳子理事のお話を伺いました。

—事務局の主な仕事は何でしょう？

M：一言でいうと「雑用」と「窓口」でしょうか。具体的には、まず会員の受け付けと名簿の作成という会員管理です。それから毎月の理事会の開催。また講演会など事業があるときは、そのお知らせを出して出欠を受け付け、資料を作る。ニュースレターの発送。時にはUIFAに関する問い合わせに応えたり、資料を送ったりもします。

—それだけの業務に何人で対応なさるのですか。

M：私と事務所の小池、半沢の3人を中心に会社ぐるみのボランティアです。

—会員がお手伝いできる部分はないでしょうか？

M：雑用がほとんどだから人をお願いする事が難しいのですが、2年後の日本大会の準備が本格的に始まったら、活動しやすいシステムを考えて会員の皆さんにお願いしたいと思っています。その節はどうぞよろしく。来年の事をいうと鬼に笑われそうですが、1月15日には新年会を兼ねて「日本大会実行準備ワークショップ」を開く予定です。詳しくはお知らせを送りますのでスケジュールを確保しておいてくださいね。練習のために英語でやってみようか、などラジカルな意見も出ています。

—ところで現在は何が進行中でしょうか？

M：11月22日に、「ハンガリー大会の報告と次回日本開催のお知らせ」の記者発表を行います。そのための資料や招待者リストを用意していました。それから、11月30日がハンガリーの報告会ですね。そうそう、その出欠の返答がまだ来ていないのです。私から会員の方をお願いしたいことは、送った郵便物にたいして返事が欲しいという一点です。

こうしてお話を伺っている間にも、他の理事の方から連絡がはいたり、UIFAの仕事が松川さんの時間に随分食い込んでいるのがよくわかりました。でも九州の会員の方が上京の折に事務局を訪

ねたいとの連絡に、「そういうのは大歓迎」という松川さん。

「せっかく来ていただいてお相手できないと申し訳ないので、まず、連絡してからにしてください。念のため。」

—忙しくてもUIFAの活動をして行く原動力は何でしょうか？

M：それは、UIFA会長ド・ラトケルさんの魅力が大きいですね。1983年に初めてUIFAに参加してお会いした時、人権意識が高く、しかもユーモアにあふれた、とても素敵な人だと思いました。またその時、専門集団で旅する楽しさも初めて味わいました。日本国内だけでも、会員の方々との交流の楽しさがありますよね。

人間大好きな松川さんだから、雑用に明け暮れる事務局を4年間も続けて来られたのでしょう。事務局が身近に感じられました。会員の皆さん、どんどん事務局を訪ねましょう。



### ■第11回UIFAハンガリー大会報告会

日時：11月30日（土） 13:30～16:30 TEL. 03-5322-6500

場所：リビングデザインセンター OZONE 8F セミナールーム

### ■日本大会実行準備ワークショップ

日時：1997年1月15日（水） 時間・場所未定

### ■役員会の報告

第7回役員会（96年9月17日）役員12名出席

第8回役員会（96年10月8日）役員12名出席

第9回役員会（96年11月13日）役員13名出席

共通議題：UIFAハンガリー大会、UIFA日本大会、東京女性財団の助成研究及び海外交流の会等について。その他。

### ■会計担当からのお願い

今年も半年以上過ぎましたが、まだ会費を支払ってくださらない方が多数いらっしゃいます。言うまでもありませんが、会費はみなさんの会費でなっています。まだの方は、早急にお振込みください。尚、会社名で振込まれますとどなたかわかりませんので、個人名のみでお願いします。カードで振込む時など特にご注意ください。

年会費 ¥15,000

振込先 住友銀行信濃町支店 普 847503

### ■広報だより

'96年もあと1ヶ月 本年最後の News Letterをおとどけます。

第12回日本大会開催に向け本格的な準備も11月22日のプレス発表を皮切りによいよスタート。本号からたのしい若いスタッフが加わり、誌面を視野を広く内外に向け、多くの方々の参加を得て活きの良い News をお伝えしようと思っています。

担当：飯島、川嶋、渡辺、柏原、田中